

絆を力に一步ずつ

仙台市内の中学校で唯一津波被害のあった高砂中学校。震災の混乱の中、生徒たちはどのように行動したのか、そして震災をどのように乗り越えてきたのか、高砂中学校の先生方に取材した。

1 あの日の高砂中学校

3月11日、高砂中では翌日に卒業式が予定されていたため、3年生は午前授業で帰宅し、午後から1、2年生が体育館や教室で準備に当たっていました。その時です。立っていることもできないほどの、あの巨大地震が発生しました。一時校庭に避難したものの、



水没した校庭

大津波警報の発表を聞き、屋上に避難。地震発生から1時間後には押し寄せた津波により、校庭が水没してしまいました。学校に残っていた生徒はそのまま学校で一夜を過ごしました。教室は避難してきた住民で座るのが精一杯。地域の販売店から寄付していただいた飲み物は、ペットボトルが5人に1本でした。寒さの中、毛布は行き渡らず、カーテンや暗幕を利用しました。

2 地震の混乱の中で

学校の避難所では、お年寄りに部活動のウィンドブレーカーを貸したり、浸水のため裸足になってしまった住人に靴を貸したりした生徒もいました。仙台港の方角からは火柱が上がっていましたが、幼い子が不安にならないようにする生徒の姿もありました。



小さな子どもと本を読む生徒



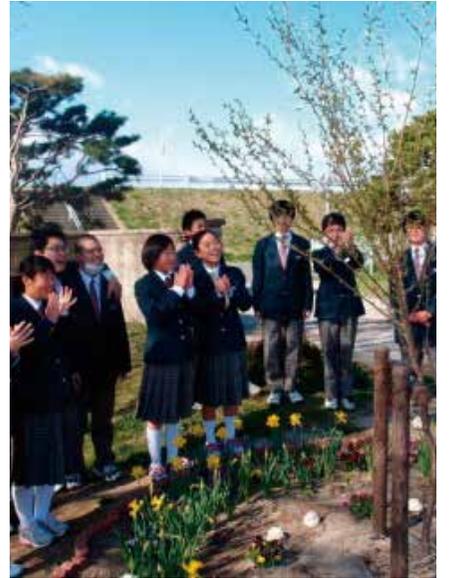
校庭の土砂を運ぶ生徒

一夜明けて、水は引いていたものの、校庭はたくさんの土砂と動かない車で埋め尽くされていました。卒業式の準備をしていた体育館は基礎が破壊され、使用できなくなりました。今まで見慣れていたはずの風景が一変してしまったのです。生徒たちは校庭の土砂をかき出したり、支援物資の運搬をしたりするなど自分たちができることを探し、精一杯手伝えました。避難してきた幼い子どもたちに絵本の読み聞かせをする姿も見られました。生徒たちは「高中魂」を合い言葉に、みんなで一步ずつ前進していきました。

3 多くの人に支えられて

高砂中には日本中、世界中から多くの応援が寄せられました。サッカーやスケートなどプロスポーツ選手からの支援、世界各国からの応援メッセージ…。その中で、今でも続いているのが長野県伊那市立東部中学校との交流です。

高砂中の正門にはこれまでの高砂中生を見守ってきた大きな桜の木がありました。しかし、津波による塩害のため、震災の年に咲いたのを最後に、枯れてしまったのです。それを知った東部中の生徒会が伊那市に掛け合い、門外不出の桜と言われた天然記念物「タカトオコヒガンザクラ」を寄贈したのです。桜は「希望（あかり）」、「未来（みち）」と名付けられ、平成25年春、体育館の復旧とともに一輪のつぼみをつけたのです。



東部中との交流「桜プロジェクト」

4 今、私たちにできること

震災から4年あまりが経ち、夏休みの校庭や体育館では、部活動で元気に汗を流す高砂中生の姿が戻ってきました。当たり前前の光景に見えますが、そこには高砂中生が震災を乗り越えてきたからこそその力強さがあります。

高砂中では震災を風化させないために、「私たちに何ができるのか」をテーマに、地域への貢献活動や他県中学校との交流活動など様々な取り組みをしています。地域合同の避難訓練では、幼児やお年寄りに手を貸す姿が見られるようになり、「守られる側から、守る側へ」と意識が確実に変わってきています。また、部活動を通して小学生と関わることにより、地域での一体感も育ってきています。震災を乗り越えてきた高砂中生は、これからも地域の中で中心的な役割を果たしていくでしょう。



震災や復興を伝える防災展示室